

【第 1 7 1 話】裏生徒会の誘惑

漸く課題を片付けた時には明け方近くなっていた。が、恭一は習慣的に短い時間でも睡眠はとることにしている。朝食に間に合うよう仕掛けたモーニングコールで飛び起きた恭一は、慌ただしく身支度をしてから部屋を駆け出した。

食堂はいつもながら賑やかだが、昨日から少し雰囲気が変わった。というのも、それまで親しくする相手がいなかった恭一にやたらと話しかけてくる寮生が増えたのだ。だが、恭一は当たり障りなく挨拶をするだけにしておいた。

もしかしたら中途退学して別の学校に入る可能性だってあるんだし！

いつもなら独り言を口にしてしまうところだが、寮生がひしめき合う食堂では慎むべきだろう。思ったことは心の声で言うだけにして、恭一は今朝も一人で食事を摂ることにした。

今日は珍しく粥がメニューに出ていた。粥だけではパワーが足りない気がしたが、恭一はわざわざメニューに組まれていることがどうしても気になって、粥を食べることにした。程よい加減に煮込まれた米は、原型を留めないほど壊れてはおらず、半分ほど欠けたくらいになっている。驚くほど均一な壊れ方だ。

レンゲにすくった粥に細い息を吹きかけて適度に冷ましたところで口に入れる。その瞬間、恭一はその場に固まった。香りから予想はしていたが、今日の粥の出汁は恐ろし

いことにアワビが使われている。しかも干しアワビだ。その出汁に邪魔をしない程度のあっさりとした味付けと蒸し鶏のささみ、そして三つ葉が粥に絶妙にマッチしている。

かきこみたくなるような美味さだが、恭一は用心深く少しずつ粥を味わった。この粥は珍しくおかわりは出来ない。だがこの味なら仕方ないことだろう。足りない分は別のメニューで補うことにして、恭一は時間をかけて粥を味わってから、焼きおにぎりの茶漬けと御味御汁をチョイスした。

朝食をゆっくりと味わったおかげで、恭一が寮を出たのは朝のホームルームまで数分、という時間だった。寮を駆け出した恭一は周囲に誰もいないことを確認してから、ショートカットルートに行くことにした。

寮が建ち並ぶ場所から少し外れると、丘の斜面に出る。そこを真っ直ぐに進むと学校の正門ではなく、裏手に出られるのだ。が、その前にフェンスを越えて行かなくてはならない。恭一は鞆を背負うと高いフェンスを難なく上り、丘を駆け上がった。

傾斜した場所だがコツさえ覚えれば走るのは苦ではない。一気に丘を駆け上った恭一は、校舎を取り囲む背の高いフェンスによじ登った。一番上まで昇ったところで、鉤縄を投げる。狙い通りに校舎の柱に鉤がかかった瞬間、恭一はフェンスを蹴って飛び上がった。鉤縄を引きながら目的の非常階段に飛び乗る。

「セーフ、っす」

非常階段から校舎に入りながら恭一はほっと息を吐い

た。鈎縄と靴を回収して上履きを鞆から取り出して履き替える。三階の非常階段から恭一のクラスまではそれほど離れていない。よしよし、と呟いた恭一は、その直後、気配を感じて慌てて駆け出した。

いつの間に潜んでいたのか、非常階段のドアの内側にいたらしい菖が迫ってくる。恭一は慌てて走りながら天井を指差した。

「もう、チャイム、鳴ってるっすよ！ 俺、遅刻はごめんなんで、今日は追いかけてこは勘弁っす！」

恭一が叫ぶように言うのと、チャイムが鳴り響くのはほぼ同時だった。

「遅刻確定ですわね。この講義は初回に出席しなければキャンセルになりますわよ」

「まだ間に合うっす！」

背後から聞こえる菖の声を聞き終わる前に、恭一は手近な窓に飛びついた。鍵を開けて全開にしてから、渡り廊下の向こうに見え隠れしている教師に呼びかける。

「先生！ そこの窓、開けてくださいっす！」

恭一の声が中庭に響くと、廊下を歩いていた教師が驚いた顔をしつつも窓を開けてくれる。恭一は再び鈎縄を投げて、教師が開けてくれた窓に鈎を掛けるとジャンプした。軽く窓を踏み切った恭一は、縄を一気に引きながら校舎の壁を蹴って教師が開けてくれた窓に飛び込んだ。

「高橋恭一、遅刻、と」

窓を開けてくれた教師が薄型の端末を取り出して呟く。
えー！ と悲鳴を上げて恭一は老教師に飛びかからんばかりに身を乗り出した。

「間に合ってるっす！ 先生より早く教室に入れば、問題ないっすよね！？」

「私が窓を開ける時間が消費されている。その分、講義開始時刻が遅れた。問題なく講義が開始されたとしたら、君は遅刻だ」

うんうん、と嬉しそうに笑いつつも教師が慈悲のないことを言って教室に入っていく。そんな一、とぼやきつつも恭一は教師に手招きされて教室に入った。遅刻はしたものの、講義は受講させてくれるようだ。一般教科は単位を落とすとまずいことになる。そのことが判っていたから無茶をしたのだがその甲斐はあったらしい。

教室に入った恭一は何故か生徒たちの拍手に迎えられた。何だろう、と思いつつも恭一はどうもどうも、と挨拶して空いた席についた。ふう、とため息を吐いたところで何気なく隣を見た恭一は思わず引きつった。何故か隣の席には隆史が座っていた。しかもひらひらと手を振っている。

「いやぁ。今朝も派手な登校だったなー。スタントでもやってんのか？」

「何で名倉さんがいるっすか！ これ、一般教科っすよ！？」

「俺もこの講義は受講してんだよ」

小声でやり取りしてから恭一はなんだかなぁ、と呟いて

鞆から端末を引っ張り出した。既に出席確認が始まっている。

「先生、わたくしも講義を受講させていただいてよろしくて？ その方を認められたなら、構わないでしょう？」

不意に教室のドアが開いたかと思ったら、何故か菖が現れる。げっ、と思わず息を飲んだ恭一はこそこそと隠れるように身を縮めた。

「ああ。如月菖さんだったかな？ 構わんが、君は私の講義の受講希望を出していなかっただろう？ この通り満席だが、どうするかね？」

教師がのんびりと教室を見回して言う。確かに教室の机は満席状態になっている。恭一は辛うじて空いているところを見つけたのだ。

「こっち、寄れば座れんだろ。……ほら、高橋。そっちに寄れ」

隆史が何故か唐突にそんなことを言い始める。恭一はごく小さな声で反論した。

「えー！ 何でそんなこと言うっすか！ 面倒なのは嫌っす！」

「いいから寄れよ。この講義は貴重なんだよ。座れなかったらあいつが暴れるかも知れねーだろ。そっちのがめんどくせえ」

確かに正論かも知れない。恭一は仕方なく隆史の言った通りに席を詰めた。長い机と長い椅子が設えられている教

室は、個々の席はないのだが、ひとつの机には三人ずつついているのだ。そこを四人で使うとなると、かなり詰めなければならない。

「すみませんっす、そっち、寄ってもらえるっすか？」

左隣の見知らぬ女子生徒に頼んで、恭一は可能な限り左に寄った。すると何故か隆史が左にではなく、右に寄って恭一の隣に空席を作ってしまう。恭一は思わず悲鳴を上げそうになったが、それより早く菖が颯爽と歩いてきて、当然という顔で恭一の隣に腰掛けてしまった。

「みなさま、ご協力ありがとうございますの」

微笑んだ菖が生徒達に微笑みかける。恭一は悪夢だ、と心の中で呟いて出来るだけ菖を見ないように心がけることにした。

講義が始まると、それまでの賑やかさが嘘のように教室内は静まりかえった。語学のうちのひとつの講義なのだが、恭一は筆記が苦手ということで受講することにしたのだ。

それにしても特クラの名倉さんまで受講するってどういうことっすかねー。

独り言を口にしそうになって、慌てて恭一は口を押さえた。今は講義中なのだ。しかもかなりのペースで講義は進められている。講義は口語と文語の二本立てで行われていく。口語はともかく、文章を書くところで恭一は想定通りに躓いてしまった。

「うー、筆記は苦手っす」

ごく小さな声で言ってしまってから、恭一は慌てて口を押さえた。つい癖で声が出てしまった。が、生徒達は集中しているためか、こちらを向いたりはしなかった。

……唯一、菖を除けば、だ。恭一の独り言を聞きつけたのか、菖が身を乗り出して恭一の端末に軽く触れる。恭一が躓いていた文章の先を菖がすらすらと書いていく。それを見て、恭一はなるほど一、と素直に感心してしまった。

「筆記は苦手と仰ったということは、会話には自信がありますの？」

ごくごく小さな声で菖が言う。はあ、と曖昧に返事してから恭一は困った顔をして頭をかいた。

「読み書きより先に話せないと駄目だったんす。話せれば、まあ、何とかなっただす」

「意外だな。高橋、もしかして語学得意なのか」

今度は菖の向こうにいる隆史が小声で話しかけてくる。講義中っすよ、とぼやきつつも、恭一ははあ、とまた曖昧に返事した。

「はい、そこ。講義中に私語は慎むように。減点1」

教卓前にいた教師がにこにこ微笑みながら言う。それと同時に恭一の端末画面に減点の文字が表示された。隆史がごく小さな舌打ちをし、菖が端末画面を見て首を傾げるような仕草をする。どうやら恭一と一緒に菖と隆史も減点されたらしい。

九十分の講義はあっという間に終わってしまった。次は、と恭一は慌ただしく端末を鞆に入れて席を立った。

「次はオリエンテーションですわね。芸術は何を受講しますの？」

菖に質問されて恭一はぎくりと身を竦めた。助けを求めようと菖の向こうを見たが、隆史は既に席を立て教室を出るところだった。

「あの、まだ決めてないっす。なので、すみませんっす！」

がばっと頭を下げた恭一は急いで教室を駆け出した。菖が背後で何か言っていた気がしたが、無視して廊下を走る。途中、若い教師に廊下を走るな、と注意されたが、恭一はすみませんと謝りつつも速度を落とさず校舎内を駆け回った。

オリエンテーションでは受講予定の講義の見学などが出来ることになっている。恭一は追いかけてくる菖から何とか逃れ、調理室前で足を止めた。

そういえば今朝は軽めに食事をすませてしまったので、少し腹が減った気がする。だが昼食まではまだ時間がある。受講したい講義があれば見学に行くのだが、残念ながら恭一にはそういった目的はなかった。

食堂に行けば早めの昼食をとることも出来るだろう。が、菖に先回りされていそうな感じもする。恭一は難しい顔をして調理室前をぐるぐると歩き回った。

「あら、話題の忍者くんじゃないですか」

突然、調理室のドアが開いて知らない女子生徒が顔を覗かせる。恭一はびっくりして反応が遅れてしまった。

「え、あの、忍者じゃないっす。えーと、それは……？」

女子生徒は三角巾とエプロンを身に着け、手にはミトンをつけて鉄板を持っていた。その上に並んでいるのは菓子のようだ。焼き菓子の中でもボリュームがあるマドレーヌだ。

「焼き菓子定番のマドレーヌっすね！ この香りは……バターと小麦と卵が美味しくミックスされてるっす！」

うんうん、と頷いてから、恭一ははっと我に返った。しまった。つい見知らぬ相手に偉そうに言ってしまった。恭一は慌ててすみませんっす、と謝った。

「調理実習で作ったんですけど、食べます？ 試食者絶賛募集中ですよ～」

にこにこと微笑んだ女子生徒が言うのを聞いて、恭一は思わず挙手した。

「はい！ 是非、頂きたいっす！ あっ、でも、通りすがりのおれが食べても、平気っすか？」

何気なく調理室の中を覗こうとした恭一の視界を遮るように、その女子生徒が横移動する。怪訝に思った恭一は、目の前の女子生徒の背後で知らない女子生徒たちが賑やかな声を上げていることに気付いて慌てた。何故かは判らないが調理実習室にいる生徒たちがこっちを見ている気がす

る。

だがそこで恭一の腹がぐー、と音を立てた。

「通りかかったのも何かの縁ですって。一名様入りまーす」

にっこりと笑った女子生徒が振り返って言うと、途端に調理実習室から黄色い声が上がった。はいはい、と女子生徒が頷いて恭一の背後に回ったかと思うと、そのまま背中を肩で押す。恭一は香りに釣られてついつい調理実習室に入ってしまった。

知らない女子生徒たちが歓声を上げて、次々に菓子を持ってくる。恭一は困りながらも、差し出された菓子を取り上げて口に運んだ。

「……これ、混ぜる時に分離したっすね。舌触りが悪いっす。プレゼントとかにするんなら、砕いてチーズケーキとかの台に加工した方がいいっす」

最初に食べた菓子の感想を述べた恭一は、はっと我に返って菓子をくれた女子生徒に謝ろうとした。が、何故かその女子生徒は力強く頷いてありがとうございます、と礼を言って去った。交代、とばかりに別の女子生徒が今度はクッキーを差し出してくる。頂きます、と言って恭一はありがたくクッキーを口に運んだ直後、眉間にしわを寄せた。

「駄目っす！ 何でココアをケチったっすか！ バターもレンジ使って溶かして煮立たせたっすね！？」

「えっ、ごっ、ごめんなさい！」

「やり直しっす！」

そんな感じで次々に恭一は試食をしていった。高校に入るまで調理をしたことがない、という女子生徒も中にはいたが、清陵高校なのだから仕方ないのかも知れない。

「自分ちのキッチンに入ってみろって言うつもりはないっす！ でも、これはないっす！ だめだめっす！ ていうか、味見くらいした方がいいっすよ！？」

そんな生徒の作った菓子にも容赦のない評価を下した恭一は、最初に会った女子生徒から差し出されたマドレーヌを受け取った。

「これは多分美味いっすよ。……そういえば、名前、言っ
てなかったっすね。おれは1のDの高橋恭一っす」

「私は2のUの三沢里名です」

にこにこと微笑みながら自己紹介した里名を見てから、恭一は手につまんだマドレーヌを見下ろした。ゆっくりと口に運んで咀嚼する。

「……うん。美味しいっす。甘さ控えめ、ご家庭の味って感じがいいっす。卵とか小麦、バターもちゃんとしたものを使ってあるし、混ぜ方も上手いっすね。これはこのままプレゼントしても、男子喜ぶっすよ、きっと」

うんうん、と頷いて恭一がそう言うと、途端に調理実習室内にため息が満ちた。もしかしたら他の女子生徒たちも男子にプレゼントするつもりだったのかも知れない。

～立ち読み版はここまでです～